横幹〈知の統合〉シリーズ創刊

遠藤　薫*

1. 横幹〈知の統合〉シリーズ創刊

2016年4月10日，いよいよ,「横幹〈知の統合〉シリーズ」の第1弾，第2弾として,『〈知の統合〉は何を解決するのか』と『カワイイ文化とテクノロジーの隠れた関係』が，東京電機大学出版局から刊行される運びとなった.

横幹連合が標榜する「横断型基幹科学技術」とは,「論理を規範原理とし，自然科学，人文・社会科学，工学などを横断的に統合することを通して異分野の融合を促し，それにより新しい社会的価値の創出をもたらす基盤学術体系である.［補足説明］たとえば，社会，人間，環境，生命，経営，組織マネジメントなどを扱うために生み出された，統計学，シミュレーション学，最適化手法，情報学，設計学などの学術体系で」あり,「横幹連合は，文理にまたがる43（設立時）の学会が，自然科学とならぶ技術の基礎である「基幹科学」の発展と振興をめざして大同団結したもので，限りなくタテに細分化されつつある科学技術の現実の姿に対して,「横」の軸の重要性を訴えそれを強化するためのさまざまな活動を行う」ことを目的としている（横幹公式サイト [1]）より）.

この目標をさらにメタレベルで表現するならば,〈知の統合〉ということになるだろう．それは学術的な目標であるにとどまらず，環境問題や自然災害など，現代の諸問題を解決するための緊急課題といえよう.

このことを広く知っていただくためにこのシリーズは企画された．以下，その内容について簡単にご紹介する.

2. 第1弾『〈知の統合〉は何を解決するのか』

この横幹〈知の統合〉シリーズの第1弾が,『〈知の統合〉は何を解決するのか–モノとコトのダイナミズム』である.

第1弾ということもあって，この巻では横幹連合をこれまで牽引してきた方々（歴代の会長・副会長）が，横幹連合が目指す〈知の統合〉についての想いを具体的に語っている.

本書の「はじめに」で，出口光一郎会長は次のように書いている．本書は,「〈知の統合〉は何を解決するのかを，モノとコトのダイナミズムという視点から論じます．本書の位置づけは，次のようにして捉えることができます．まず，我々の視野の左側に『モノ』をおきます．右側には『コト』をおきます．ただし，この『モノ』と『コト』を相反する対極としてその対比を考えるのではなく，その間に広がるスペクトルを想定します．ここで,『モノ』『コト』は何であるのかは，あえて厳密に定義はしません．本書の随所で，それらが何であるのかが論じられるからです．ただ，一番左側には我々人間の力の及ばない自然物としてのモノが来て，一方，一番右側には我々の感情といったものが据えられることになります．右へ行くほどコトの領域になります．このモノからコトに至る広い領域で，我々は多くの課題を抱えています．一番左側の自然物や自然現象を対象とする学問は自然科学であり，営々とした人類の知の挑戦の連なりがあります．ただ，そこからちょっと右側に目を移すと，科学技術の対象としては混沌とした未整理の広がりが見えます．そして，現代ではこの自然から離れた領域で，人間・社会の問題がますます重く大きくなりつつあります．この領域の課題の解決を〈知の統合〉を通して見渡し，その解決への道筋を探るのが本書の目的であり，そこでの鍵が，ここで言う『モノからコトへと至るダイナミズム』です」.

各章の内容は，次の通りである.

第1章 人工物観：吉川弘之（東大名誉教授）

第2章 コトつくりからシステム統合へ：木村英紀（東大名誉教授）

第3章 コトを測る： 出口光一郎（東北大名誉教授）

第4章 マネジメントとコトつくりの科学技術：鈴木久敏（筑波大名誉教授）

第5章 国際・学際・業際： 安岡善文（東大名誉教授）

*学習院大学法学部政治学科　東京都豊島区目白1-5-1

第６章 サービスイノベーション–システム科学技術からのアプローチ： 舩橋誠壽（北陸先端科学技術大学院大学シニアプロフェッサー）

第７章 日本のモノづくりとそのメタ・システム化–ガラパゴス化を超える新たなパラダイム： 遠藤薫（学習院大学教授）

Fig. 1: 第 1 弾『〈知の統合〉は何を解決するのか』の表紙

3. 第 2 弾『カワイイ文化とテクノロジーの隠れた関係』

この巻は，2013 年度の木村賞を受賞された大倉典子氏の論文に触発され，2014 年横幹シンポジウムで展開されたオーガナイズド・セッションから生まれたものである．

近年世界的に注目されている「カワイイ」という感性的価値を，感性工学，情報工学，社会学，経済学，産業論など多面的に論じている．まさに文理融合の面目躍如といった内容であり，すでに各方面から反響を得ている．

ただし,「はじめに」にもあるように，本書は表層的な流行を追おうとするものではない．必ずしも正統的とみなされていない，ポピュラーな価値だからといって，真面目に検討するに値しないものとみなすのは，学問の怠慢とさえいえる.「正統的」とみなされている文化は，すでに理論化されているかもしれないが，反面，いままさに活き活きと動き，瞬間ごとに変化し，だからこそ人びとを引きつけているポピュラー・カルチャーに比べて，そこから人びとが感じ取っている「価値」のダイナミズムは弱まっている．もしわれわれが，社会のダイナミズムとメカニズムの実態に迫ろうとするのなら，まさに「カワイイ」に代表される，ポピュラーな感性的価値を，システマティックに理解する必要がある．本書はそれを目標として，学問領域の枠を超えて，一流の研究者たちが「カワイイ」価値に真摯に向き合った成果である」.

各章の内容は以下の通りである．

第１章 なぜいま,「カワイイ」が人びとを引きつけるのか？–「カワイイ」美学の歴史的系譜とグローバル世界：遠藤薫（学習院大学教授）

第２章 「かわいい」の系統的研究–工学からのアプローチ： 大倉典子（芝浦工業大学教授）

第３章 絵双紙から漫画・アニメ・ライトノベルまで–日常性の再構築のメディアとしての日本型コンテンツ： 出口弘（東工大教授）

第４章 カワイイと地元経済–ローカル・キャラクターの経済効果： 田中秀幸（東大教授）

第５章 かわいいとインタラクティブ・メディア：武田博直（VR コンサルタント代表）

第６章 複製技術と歌う身体–子ども文化から見た近代日本のメディア変容： 周東美材（東大特任助教）

Fig. 2: 第 2 弾『カワイイ文化とテクノロジーの隠れた関係』の表紙

4. 今後に向けて

このシリーズはいま創刊されたところである．今後，さまざまなテーマで続々と刊行されていく．現在すでに予定されているだけでも,『コトつくりとヒトつくり (仮)』,『データ・サイエンスで社会を解く (仮)』,『ロボットはトモダチか？(仮)』などが出番待ち中である．横幹連合会員学会のみなさまにはさまざまなかたちでご協力いただきたいと考えている．まずは一度手にとっていただければ幸いである．

参考文献

[1] 横断型基幹科学技術研究団体連合（略称 横幹連合）ホームページ http://www.trafst.jp/aims.html.